市戦没者追悼式を開催



終戦から81年

平和への願い 次の世代へ

先の大戦で亡くなった市内837柱の冥福を祈る市戦没者追悼式は10月20日、遺族など約60人が参列し、西根地区市民センターで行われました。

黙とうの後、遺族を代表して追悼の言葉を述べた大更遺族会の工藤忠義(ただよし)会長は「家族を心配しながら逝ったであろう父の無念さを思うと、81年という歳月が経っても、哀惜の念を忘れることはできません。私たち遺族は、戦後の苦難の道のりを振り返りつつ、幸せを感じる八幡平市の実現を目指し努力していく」と、自身が幼少のときに、異国の地で戦死した父を思い、平和への誓いを新たにしました。この後、参列者は、戦没者を悼み祭壇に花を手向け、静かに手を合わせました。

また、式では、安代中３年の石田修己(なおき)さんが「平和への誓い」をテーマに作文を発表しました。市は追悼式に先立つ７月７日、安代中を会場に甘竹(あまたけ)勝郎(かつろう)県遺族連合会会長を招き、講演会を開催。追悼式での発表は、先の講演を踏まえて生徒が感じたことをまとめたものです。石田さんは「戦争の記憶を持っている人の思いを後世に引き継ぐことが、私たち若い世代の使命だと感じた。戦争の恐怖や家族を失う悔しさをしっかりと受け継いでいきたい」と平和への願いを未来へつなぐ決意を示しました。



講演から得た気づきを参列者に伝えた石田さん

おはなし TALK

父が昭和20年にフィリピンで戦死



工藤 忠義(ただよし) さん
（83歳・両沼）

昭和18年３月、私が生後約３カ月の時に、父は出征しました。訓練を経て、数カ月後には異国の地に赴いたのではないかと思います。

父の死亡日は20年４月11日とされています。フィリピン・マニラ東方40キロで戦死と書かれた戦死公報とともに届けられた遺骨箱には、遺骨ではないものが※入っていたと聞きました。

20年ほど前、慰霊団の一員として、フィリピンでの慰霊祭に赴きました。ガイドからは、深刻な食料難やマラリア（感染症）で亡くなった人も多いと聞きました。父の戦死状況は定かではありませんが、国のため、戦いに赴いた戦地で、病気で命を落とした方がいるという話を聞くと「戦争って何なのだろう」と、言葉に表せない思いに駆られます。

父の記憶はありません。父は「子どもの顔を見よう、絶対に死なないで帰ってこよう」という気持ちだったと思います。戦後、母や祖母は大変な思いをしたと思います。もう少し早く戦争が終わっていれば、父は帰ってくることが出来たのにな、と思います。

※現地で遺体の収容や火葬を行うことができない場合、遺骨の代わりに、名札や現地の石などが入った遺骨箱が遺族に届けられたと伝えられている